

令和5年度学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立七尾高等学校

1 豊かな人間性と国際性の育成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。	・生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 ・各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時）	【成果指標】 （生徒） 一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が A 85%以上 B 75%以上 C 65%以上 D 65%未満	【12月実施学校評価アンケート】 （生徒） B 80.8%	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】コロナが5類に移行され、校外へのボランティア活動が増加した。また、活動振り返りシートや他者からの感謝の声掛け等により、生徒の実感につながったと考えている。 【今後の取組】能登の創造的復興に向けたボランティア等、地域貢献につながる活動を支援していきたい。
・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。	・令和5年度地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業（1、2年） ・異文化交流 ・留学希望生徒への支援	【満足度指標】 （生徒） ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている。	4月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 75%以上 C 70%以上 D 70%未満	【12月実施学校評価アンケート】 （生徒） B 76.9%	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】前回よりも6ポイント以上の向上が見られた。地域の特色を活かしたふるさと教育推進事業における来校者との話し合いや、探究学習でふるさとについて調べる活動が増えたためと考える。 【今後の取組】能登の創造的な復興を掲げ探究活動を進める中で、能登の魅力を再認識し理解を深めることで、ふるさとに対する誇りや愛着を育てていきたい。
		【満足度指標】 （生徒） 異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が高まっている。	4月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【12月実施学校評価アンケート】 （生徒） A 83.7%	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】特に伸びの高かった1年生では、2年生生徒による留学報告会や、本校ALTによる人権講話などでの指導を行い、授業内でも各担当者より異文化理解に関する話を行ったためと考える。 【今後の取組】留学に関する情報提供を続ける。特に、石川版トビタテ留学ジャパン等を周知し探究活動を活かして実地で活動ができるように生徒へ働きかけを行っていく。
学校関係者評価委員の評価		地震後の避難所における生徒たちのボランティアに勤しむ姿に勇気づけられている。震災により難しい目標となるが、復興に向けた地域の取組に目を向けさせ、ふるさとを思う気持ちを育んでいってもらいたい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		地域からの要請に応じて部活動単位および有志を募り能登半島地震に係るボランティア活動等、積極的に活動に参加し、ふるさと愛を育みたい。融合プロジェクト等の探究活動を通して、地域の課題を発見し解決する取組を一層深化する。			

2 進路志望実現のための学力の形成					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<ul style="list-style-type: none"> 基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。 生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> 志を貫くためのキャリア教育 キャリア教育講演会 全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 学習時間調査 ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 進路情報の発信 進路講演会 難関大学入試問題解法研究 金沢大学入試問題解法研究 習熟度別学習指導（週末課題） スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 金沢大学による出張講座 保護者への進路説明会 学習計画の作成とチェック 志望校群別検討会（2年） 志望校検討会（3年） 出願校検討会（3年） 志望理由書の作成（1、2年） 批判的思考力育成 放課後学習会 	【成果指標】 （生徒学年別） 第1志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して A 100%以上 B 80%以上 C 80%未満	【12月実施学校評価アンケート】 <生徒：1年生> B 94.2% <生徒：2年生> B 89.3% <生徒：3年生> B 95.6%	【判断基準】 各学年目標 1年120人（6割） 2年140人（7割） 3年160人（8割） Cの場合は改善策を検討する。 【分析】 自らのキャリアを明確にできる生徒が、1年生は前回77名から今回113名、2年生は前回110名から今回125名と大きく増加した（3年生は前回152名から今回153名）。キャリア講演会等のキャリア学習や、進路講演会等の進路学習が、生徒が自らのキャリアを考える契機となった。 【今後の取組】 自らのキャリアについて主体的に考える取組を今後も継続する。学校と保護者・地元の事業所、大学、外部人材等との連携を深めながら、生徒のキャリア学習を支援していく。
		【成果指標】 （1年生生徒） 学習習慣を身につけ、学力を向上させている。	（進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満	【進研模試7月と1月で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】 <生徒：1年生> B	【判断基準】 1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】 授業や探究活動、進路学習に対して前向きに取り組む生徒が多く、成績を伸ばすことができた。 【今後の取組】 進路学習を進め学習に対する意識を向上させるよう努めてきたが、一過性のものにならないよう継続的なフォローが必要である。ホームルームや面談を通して、効果的に刺激を与えていきたい。また、1年時の復習や弱点分野克服に向けた学習計画を立て学習習慣をよりよいものにしていくよう支援していく。
		【成果指標】 （1年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試1月）	1月進研模試での学力到達度（GTZ）のSランクの生徒が A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満	【1月進研模試3教科総合での学力到達度（GTZ）】 <生徒：1年生> B	【判断基準】 1月の模試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。 【分析】 成績上位者を増やすことはできたが、まだ学習量が少なく学力を伸ばせていない生徒がいることが課題である。 【今後の取組】 基礎学力が定着している生徒には、継続的に特別講座や添削指導を行って、発展的な思考力等を養う。中下位層にも着実な学力をつけるよう基礎基本の指導を徹底し、意識の高揚を図る。

	<p>【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を向上させている。 (進研模試7月と1月の3教科総合偏差値の比較)</p>	<p>2年次に、学力を伸ばした生徒が</p> <p>A 160人以上 B 130人以上 C 130人未満</p>	<p>【進研模試7月と1月で3教科総合偏差値を伸ばした生徒】 <生徒：2年生></p> <p>C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。</p> <p>【分析】7月から10月にかけて成績を落とした生徒が改善できていない。</p> <p>【改善策】5教科型の受験までに、学習習慣を確立させる必要があった。進路講演会を機に学習習慣が改善された生徒も多く見られるため、定期的に外部からの情報を入れることが大切であるとする。</p>
	<p>【成果指標】 (2年生生徒) 着実に学力を向上させている。 (進研模試1月)</p>	<p>1月進研模試3教科総合で学力到達度(GTZ)のSランクの生徒が</p> <p>A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満</p>	<p>【7月進研模試3教科総合での学力到達度(GTZ)】 <生徒：2年生></p> <p>C</p>	<p>【判断基準】1月の模試結果で判定する。</p> <p>【分析】「しゅうかん」課題(習慣・週間)から月間課題に切り替え、弱点を発見し改善するというサイクル確立を目指したが、上位層の生徒でもそれができなかった。</p> <p>【改善策】進路意識の高揚を図り添削指導をスーパー難関大学志望者だけでなく難関大志望者まで広げる。</p>
	<p>【成果指標】 (3年生生徒) 生徒ひとりひとりが高い志望を持ち、進路実現を果たしている。</p> <p>*スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。</p>	<p>スーパー難関大学の合格者が</p> <p>A 5人以上 B 3人以上 C 3人未満</p> <p>難関10大学の合格者数が</p> <p>A 25人以上 B 20人以上 C 20人未満</p> <p>金沢大学の合格者数が</p> <p>A 35人以上 B 25人以上 C 25人未満</p> <p>国公立大学の合格者数が</p> <p>A 140人以上 B 120人以上 C 120人未満</p>	<p>【大学入試結果】 <生徒：3年生></p> <p>スーパー難関大学 B</p> <p>難関10大学 C</p> <p>金沢大学 B</p> <p>国公立大学 B</p>	<p>【判定基準】大学入試結果で判定する。 Cの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】スーパー難関大学・難関大学の合格者は目標達成とはならず、成績上位層を増やすことができなかった。一方で、国公立大学前期試験の合格者は59%、難関10大学の合格者は62%、金沢大学の合格者は74%だった。</p> <p>【改善策】 ・低学年次指導を一層充実させる必要がある。3年夏までに必要な知識・技能を定着させるための学習指導計画を再考する。 ・金沢大学のKUGS特別入試をはじめ、多様な入試制度についての分析・検討を行う。 ・授業の効果をより高めるという視点で、各教科での授業改善を推進する。</p>
学校関係者評価委員の評価	推薦で入学した大学生が大学入学後に伸びることを聞いている。学校推薦型や総合型選抜に関する情報提供や本校での取組に対してもっと効果のある入試制度を利用してほしい。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策	多様な入試制度に対応できるよう、英語外部試験や本校で取り組む探究活動を活かした指導を継続する。また、低学年段階からの進路学習では探究学習や様々な活動を通して社会を知り、望ましい職業観を醸成していく。			

3 教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。</p> <p>・教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理能力などの実践的な指導力の向上に努める。</p> <p>・校内でのOJTによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。</p>	<p>・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策のための資料の作成と配付</p> <p>・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施</p>	<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。</p>	<p>スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が</p> <p>A 100%</p> <p>B 90%以上</p> <p>C 85%以上</p> <p>D 85%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】</p> <p><生徒></p> <p>B</p> <p>93.2%</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度より 0.1%の上昇が見られた。ネットトラブルに対する安全予防対策については、執行部で動画を制作し、配信しようとしていたが、地震の影響により実施できなかった。</p> <p>【今後の取組】 執行部で制作した動画について、機を見て配信する。</p>
	<p>・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進</p> <p>・学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示</p> <p>・Google classroomを活用した復習内容の提示</p> <p>・予習チェックの呼びかけ</p> <p>・「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有</p> <p>・批判的思考力育成課題「知のよりみち」の更なる活用を図るために編集を工夫</p>	<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>国語・数学・英語において「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」と答える生徒の割合が高まっている。</p>	<p>国語・数学・英語における「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」に関して、「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 90%以上</p> <p>B 85%以上</p> <p>C 80%以上</p> <p>D 80%未満</p>	<p>【12月実施第2回生徒による授業評価】</p> <p><生徒></p> <p>B</p> <p>85.8%</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 昨年度から 1.2%増加した。スマホの使用時間（学習関連および学習以外の両方）が増加する傾向は昨年と同様で家庭学習時間に影響している。</p> <p>【今後の取組】 進路指導課、生徒課と連携し、スマートフォン利用についての指導を継続的に行う。また、授業の準備（予習・復習）へのモチベーションが下がらないよう細かな声掛け・点検を粘り強く継続していく。</p>
		<p>【成果指標】 （生徒）</p> <p>「多様な見方考え方が身につく授業」に関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p>	<p>「多様な見方考え方が身につく授業」に関して「あてはまる」・「ややあてはまる」と答える生徒の割合の合計が</p> <p>A 95%以上</p> <p>B 90%以上</p> <p>C 85%以上</p> <p>D 85%未満</p>	<p>【12月実施第2回生徒による授業評価】</p> <p><生徒></p> <p>B</p> <p>93.3%</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 各教科で研究授業が行われ、クロームブックの使い方や生徒から多様な意見を引き出す工夫など、授業改善に繋がっている。</p> <p>【今後の取組】 研究授業や互見授業で得られた工夫や発見を教科会議等で共有し、さらに授業改善を進めていく。</p>

<p>・GIGA スクール構想に基づいて1人1台端末を効果的に活用した授業を実践する力を身に付けることにより、生徒の学びの変容を促す。</p>	<p>「石川県教員研修計画」に基づいて、学年・教科を主体としたOJTによる若手教員育成を推進する。</p>	<p>【満足度指標】 (若手教員) OJTをとおして教員としての成長を実感できる。</p>	<p>OJTにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、</p> <p>A 95%以上 B 90%以上 C 85%以上 D 85%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 <教員></p> <p>D 73.1%</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】成長を実感できたと答えた教員の割合が、前回は約5ポイント下回った。互見授業の他、今年度はSTEAM教育や予備校等の授業力向上研修等に取り組んだが、成長を実感できるまでには至らなかった。</p> <p>【改善策】新たな取組が若手教員の負担感を増す結果となるため、従来の取組をより効果的に運用し、若手のニーズ、石川県が求める力量を踏まえた取り組みを行い、若手教員が成長を実感できるように、工夫・改善していく。</p>
	<p>情報課やICT支援員とも協力し、学校を挙げてGIGAスクール構想を推進する。</p>	<p>【成果指標】 (教員) Chromebookを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している。</p>	<p>「Chromebookを活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、</p> <p>A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 <教員></p> <p>C 68.2%</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】昨年度よりも判断基準を上げたため、C評価に止まった。情報課での研修や実践事例の紹介は行えたが、出前サポートや公開授業の実践が不十分であった。</p> <p>【改善策】継続した研修の実施や新たな取組みを導入することで、教員がまずは挑戦できる足掛かりを作るとともに、Chromebookを活用することで、生徒の主体的で深い学びに結びついていると実感できるようにする。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>	<p>生徒の評価が良好なのに対して、教員による評価が前回より数値が下がるものがある。教員の自己評価が向上すると、明るい学校に繋がると思われる。</p>				
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>	<p>震災後に通常業務に加えて、オンライン授業の機会が増えている。これを機に、Chromebookの活用をより一層推進し、生徒の主体的な学びに繋げる授業研究を進めていく。</p>				

4 魅力ある学校づくり					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・ 特色ある教育活動（第5期SSH事業、NSH事業）を推進し、その成果を全国的に普及する。さらに、小中学生をはじめ学校の枠を超えた科学技術交流を促進し、理数教育の水準向上を目指す。</p>	<p>学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及</p>	<p>【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。</p>	<p>本校の開発教材や報告書の閲覧件数（ダウンロード数）が、前年度に比べて増加数が</p> <p>A 1000件以上 B 500件以上 C 200件以上 D 200件未満</p>	<p>【成果指標】 A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 SSHのどの項目においても、ダウンロード数が非常に多い。ホームページにより、着実に成果普及ができている。</p> <p>【今後の取組】 これまで通り刷新を続け、さらに良いホームページにする。</p>
	<p>物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の数が増えている。</p>	<p>全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が</p> <p>A 4以上 B 3 C 2 D 1以下</p>	<p>【成果指標】 <生徒> B</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 高校生バイオサミット決勝進出1件、物理チャレンジ決勝進出1件、次年度全国総文県代表1件。</p> <p>【今後の取組】 各学会が実施する全国規模の高校生発表会に参加する。これにより本校の課題研究の成果を普及する。</p>
	<p>・ 英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進 ・ 進路達成を見据えた指導体制の構築</p>	<p>【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。</p>	<p>左記大会やコンテストに参加し</p> <p>A 優勝を含む入賞4件以上 B 入賞 3件 C 入賞 2件 D 入賞 2件未満</p>	<p>【成果指標】 <生徒> A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 弁論部で3件、郷土研究部で2件、日本政策金融公庫主催ビジネスプラングランプリで学校賞1件。</p> <p>【今後の取組】 学業と並行しながら、課外活動にも積極的に取り組めるよう生徒へ声掛けを行っていく。</p>
	<p>CEFR B1以上の生徒の増加</p>	<p>【成果指標】 （生徒） CEFR B1以上の生徒が増加している。</p>	<p>CEFR B1以上の生徒が</p> <p>A 65人以上 B 50人以上 C 40人以上 D 40人未満</p>	<p>【成果指標】 <生徒> A</p>	<p>【判断基準】 C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】 目標を大幅に超えることができた。家庭学習をするように熱心に指導を行った結果だと考える。</p> <p>【今後の取組】 家庭学習をしっかりと継続しながら、さらなる高みを目指して指導していく。</p>
<p>学校関係者評価委員の評価</p>		<p>安全・安心な環境、進路実績、日々の充実した授業が魅力ある学校として必要である。学習指導においては、上位層から下位層の生徒へのより一層丁寧な手立てを施してもらいたい。</p>			
<p>評価結果を踏まえた今後の改善方策</p>		<p>中学校と高校の結びつきを強め学力向上を繋げたい。現在、SSHの取組として能登地区の高校との共同研究を計画しているが、中学校も加え地域の自然環境に関する研究を進め、理数教育の充実・発展を図っていきたい。</p>			

5 働き方改革の推進					
重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。</p>	<p>・情報共有の仕方をデジタル化するなど工夫し会議のペーパーレス化を進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。</p> <p>・主任を中心に業務内容の可視化を図ることで計画的に業務に取り組む。</p> <p>・若プロなどの校内研修を充実し教員の資質を向上させることで、業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。</p> <p>・月2回の定時退校日と8月の閉校日を設ける。</p> <p>・長期休業中にまとまった休暇を取得する。</p> <p>・年休を計画的に取得する。</p> <p>・部活動の休養日を適切にとる。</p>	<p>【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。</p>	<p>業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が</p> <p>A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満</p>	<p>【12月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞</p> <p>D 63.0%</p>	<p>【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。</p> <p>【分析】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Google スプレッドシートを活用して、情報共有のデジタル化を進めることができた。不慣れで負担感が大きい部分もあるが、その浸透を図ることで業務の効率化が期待できる。会議におけるペーパーレス化は浸透し、効率的・効果的な会議運営が図られている。 ・分掌業務の主任への偏りが大きい。若プロ等の研修が不十分であることに加え業務内容の可視化が図られていないことが要因である。今年度のアフターコロナでの経験をもとに、業務の可視化と併せ、若プロ等の校内研修の充実を図る必要がある。 ・各種大会での生徒引率業務や業後補習が多い。併せて、年休取得率も低いことから、時間外勤務働時間が多い。ただし、この点においては、単に「働き方改革」の推進を図るだけではなく、「働きがい改革」にも留意する必要がある。 <p>【改善策】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・情報共有のオンライン化をはじめ出張伺のペーパーレス化等をさらに進め浸透を図ることで業務の効率化を推進する。 ・学校管理計画の内容を精査するとともに、計画を早期に提示することで計画的かつ組織的な分掌運営を推進する。主任を講師とした分掌業務に関する研修を実施することで若手教員の早期育成を推進する。 ・補習や部活動の運営に際しては、「働き方改革」に十分に留意しながらも、担当者の意見を参考により効果的な活動を展開することで「働きがい改革」を推進する。
学校関係者評価委員の評価	生徒や保護者の土曜補習に関する見解が異なっている。非効率な業務や取組は廃止を含めてあり方を検討すべきである。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	土曜補習については、従来の形式を改め教員も生徒も有意義に思う内容に改善していく。				